民家神衣抄

へ 13
3988

百人一首和歌姫衣抄自叙

昔周昭王以翠鳳之毛為二裘一。一曰燠質二曰暖肌矣。今也松葉館深孔雀為衣裳曰之跡著曰姫衣裳也。通之衣裳以八丈為紬藏之衣裳以木綿為飾也。如其以錦為本綿以八丈為紬。臣人一對枕姫衣抄而為百文

門號 へ13 3988
巻

41-2 6977

二朱通用物而已

天明七年丁未孟陬

楓葉山東隠士京伝老人識

ひと日まれなるものなら。何がしあるじ方は。うかれめのそとよりもよめし。さしずよりどちあちかもたうらもねく。小倉山庄の色紙うつくするかうら。倉くぎすひたいの紙はよみ人しらずりけ絵図がかほ色ましれどもなるは。名有しめでし。絵そらごといよりやわらし法性寺入道の名残ともび。いきはずあとのよ人ならばうすよのもしらし。山人山の名有人ぐら

をうしろにして。やまひでの安からぬハ。を
旅から乃寺とふそ。さら手きよ寺ぐふさうし
あはれも紫ゆかりか。こなたをの歌こそくね
どみなかいかりども。ハ。御川津の浦濃から
かハるゝ。ぞうハ玉の代乃先たち。在中将卿
寺のさる紙。今津より乃川波れぞとよみし
小路ありし君。さてもやよ玉ゆうけれども
光り。今もいま新じといひしそ。ましきや

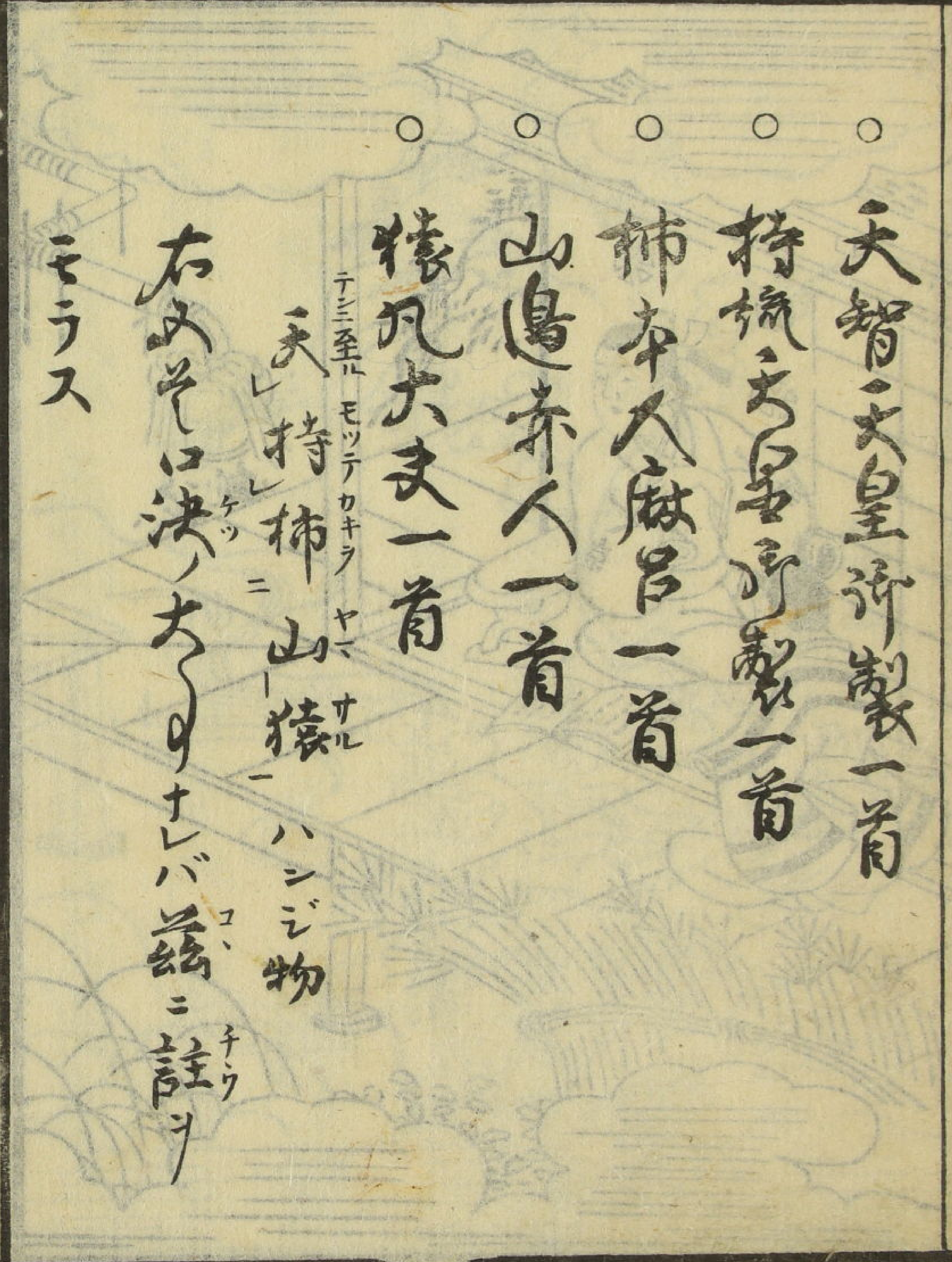
ゆりよされども。庭さまよあるしの庭乃めでゝ
移りしく。諭ども母の四阿さく。和田の川るゑ
御孫。こくてよみしたちのがのうた歌語ま
まづもとも。あまりしかし。名の川波よかしらお
そぶたさくらよ。がづ書しハ。そも乃寺のうち君
むそじあまりの川原どハめ方ゆかほせず。の帰
めうえりや。あらし。ゆ高れがつま持ひとへし。
ひらがし御かみちどりやくもふ。むしよの人

な姫。あのみちよほど物はなきかしこや。
是かれの人恋まさるよの中なれど。人も
草木もゆきげもやむ。いその手のうり
もくさぞかくうけせぞ。八雲むらの志のぶ紀
をとこ物ぐさがつ秋の田のかりほの小やハヘにぞ。
杉むらなくそそやいとこ恋歌ハその名を
桃ぞよみもおほ姫まきぞ。此ぞ翅のいなその山家
男ふかきる。松ぞそのしまをも世すに深紀。

玉章の尾の。玉濃をむりおしあはれ
ぞ。ほらぬきとむしつけその。いとぐらり。
こよりくのもみるみ世すなどおびくなり
ほぐみじかきよもぞそそて。山どりのおぶり
尾乃。ながしくもぞ。ほひのかむろが色はば
り大からず。こちらもよのほゆすずん姫

源 傳

政演画



○天智天皇御製一首
○持統天皇御製一首
○柿本人麻呂一首
○山邊赤人一首
○猿丸大夫一首

天(テニ)至(イタル)持(モツテ)柿(カキヲ)山(ヤマ)猿(サル)ハシゴ物

右ハ其口決(ケツ)ノ大ソリナレバ茲(コヽ)ニ註(チウ)ヲモラス

中納言家持(ちうなごんやかもち)

家人親王(いゑひとしんわう)　天武王子日本紀作者　又作舎人(イエヒト)

家田屋太右衛門尉(いゑだややさゑもんのじやう)　新吉原娼家

家橘(うきつ)　市村羽左衛門

家暮(やぼ)　坂東三八

家持(やうもち)　一説ニ此人リンキナカクテ。ソノクセニ紋所ハ通ナモンユヘニ。通ナ紋ヤキ持ト号ス

指なし ちゞみ ロッ谷 しん店 うら こゝろ やまうら 人の まるふ

天經或問ニ曰
九星失光而南方之落分野
○九星トハ九曜ノ星ナリ文曲ノ所ニヤ金ノ光リヲウシナツテ南方ヘアソビニ行ク

傘 コトヅ
史記註ニ曰
笠有柄者謂傘

鷺 一名雪客

かさゝぎのはせる橋よりもれ乃
しろきをみれば夜ぞふけにける
小川のしらさ橋なりのこし書となおしやれの
名とよめり
かさゝぎの○むかし君が春六月天王のまつりは
さゞむまめの茶ぶんとしもうらいしる名なり
かされどりの小ある西人傘鷺のとよめるし
はせる○さゞむまめのしろきさいかぶりの大ぶけ
まてその世をまわちのるはゞふうのみのまるん
てらひとわつくしとひとりのはゞのみのい三田の
わうきでうのとかいはまひとりのうちゝのひりのれ

元三大師御籤之記ニ曰

十	三	大	吉
楊柳遇春時	牛放桃林南	重々雨相雪裡	黄金色更輝
八ツ山の春のけしき	牛八ゐ橋の南手あそぶ	ゆくもとゞさしきのうち	そうらうなるの金のひかり

川柳句
柳樽三編ニ曰
「往べんのあるとおいとが小のさゝやく 云く
「さくしもがきゆくも山のいもうとさまのもあるべし

日本橋の白木がやらひとてたゞいまはこゝぞせり
あいしゆへはさせるとよめり
橋よりもくもわの○橋なりのそくしろもとよするゝ
家名ととおしやれの名とよう入とさり
しろきをとみれど○ひとりのはゝ者いじやうと
のく日本橋の白木へ西さてこれいゆゑや
よの旧ツをすぎすて夜はまひし世へ書く
おもふてはさとくの入れり
夜ぞふけける○それから小川までゆりとら
とるせへよがふけてゆくやちやぶんおさんで
しまひとうかうよあめね西へさゆく人いうん
しゆくおもふてそのうちてさはらかいは足で

子(ネ)年(ン)内(ナイ)雪(セツ)蒙(コウムル)催(モヨホシ)所(シヨ)線(セン)瀧(タキ)口(グチ)参(サン)差(ズ)

茶なんの ゆきさいのよ かへとうふ おめでてまおら いもあまみ さんず

白氏文集ニ曰

誰(タレカ)言(イフ)南(ナン)国(コク)無(ナシト)霜(ソウ)雪(セツ)

○南国トハ品川ノコトヲイフタモノジヤ霜(ソウ)トハヲク霜(シモ)ガコトヲイフゾ雪(セツ)トハ綿(ワタ)ノコトジヤ

白木屋引札ニ曰

きいてさうおい大安賣仕り候

東鑑五十二巻ニ曰

被(ハルヽ)行(ヨコナ)泰(タイ)山(サン)府(フ)君(クン)百(ハク)怪(ケ)白(シラ)鷺(サギ)等(トウノ)祭(マツリヲ)云々

今ありさまこいのもさぎ娘のちやきんどやアめくへり

らうらくけざうしたりとれおくへとけるとさあくらうとんざめのてまおんさおみふんば よくく引書とこんとくらんげあべし

毛詩ニ曰

振(シン)鷺(ロハ)二(ニ)王(ワウ)之(ノ)後(ノチ)来(キタツテ)助(タスク)祭(マツリヲ)也

○振鷺トハ振袖(フリソデ)ノムスメガ鷺娘(サギムスメ)ヲ。ヲドルコトデアル。二王トハ妙国寺(ミヤウコクジ)ノ。二王ノコトゾ。助祭トハ天王サマノ祭ジヤ

一説

宇治の茶つミの ぜがれありとらふ 今一ぷく一せんの うけおんどうに其の 名のこれり

喜撰法師(きせんほうし)

- 四十七騎一人 喜太八 竹森
  - 喜三太 御厩
- 喜三二 画双紙作者
  - 喜三郎 小野川
- 喜四郎 吉原越前屋
- 喜六 佐川田
  - 喜長 沢村長十郎
- 喜撰
  - 喜瀬川 大磯遊女
  - 喜代三 若女形

我はみやこのたつみしかそすむ
よをうぢ山と人はいふなり
喜石須磨治郎といふ人深川のげい
しやをよびあひしけるをとめけるゆへ
げいしやは○おれがすみかは仲町の
げいしやは
こやこの○りよしかうでこやとよぶさ
むかしであつさが今は深川のよびなにてはあらである
たつこ○深川と辰巳といふ江戸よりはたつみにあたるゆへ
しかぞすむ○これはなんぞとしかぞといふ文字
とをそてよめばへうとなりましのやぐれ

人はいふなり

列子ニ曰以徳分人謂之聖人以財分人謂之通人ト云トカク人ニ金ヲヤルデ通ダト見ヘル

白虎通巻ノ三ニ曰聖人者何聖者通也云々

みんなしはせんやくどうしてやんごく
しやうこそとをとなぞでよかり
よをうぢ山と○この山ぢまんだん出かけては
さぞめでたいなかぐひ夜はちとうちふさぎなぞ
としやれるぞらうとすいぶんうろのんぞ
つらぞあんなようろりんぞくとりのおいらわれ
そうさうなり
人はいふなり○此大じんがたとまさうちうす
女郎あるひはうちろん仲丁中のちそうげ
いしやおとこげいしや茶やの女房にまでも
人はみな此大じんのいふなりになるその
んそとなり

そのちかのおやれは山の山かへまうド女ますてこ秋と名をとらへけるよし今古おまあてゝこれをくんずふ

【八雲抄】これやれは三弥の山かへ哀しくは「上ノ句ハ是ゑふのよふあり」とふらひきまきせ秋さそるかと「下ノ句ハおぼ不がつけさるなも」

【蒙求】孝伯ガ傳ニ
窺(ウカガヒ)見(ミテ)曰(イハク)此(コレ)眞(シンノ)深(シン)川(セン)仲(チウノ)人(ヒト)也

【琴曲抄】須磨曲(スマノキヨク)ニ曰
「すまとゆふもうらの名
何りしとゆふもうらの名
「此大じん物かたりは名がきまとあんざう
すまとゆふも何りしとゆふもうらの附
きれたるなり

【年代重宝記】守わぞんと紀ノ竒ニ
「子ハせいし世寅ハそれハこゝろうぞう
卯ハめんどやまて辰巳ふぐんぞトわれぞ
「すまニてこのひやうとくを
不言(ふげん)とよいゑるろ

【長哥鷺娘】ニ曰
「すまのうらべてしほくむよりも下略
「これハかの大じんうらの附とゆふ
とんざきなやとゆし

陽成院(やうぜいゐん)

楊柳觀世音(やうりうくわんぜおん)【佛像圖彙】

楊貴妃(やうきひ) 事ハ見【長恨哥】【楊妃外傳】

楊枝屋阿幾(やうじやおいく) 事見 浅草寺内【楂面艸(サシモグサ)】

楊名介(やうめいのすけ)【源氏夕良巻】三ケノ口決【作れく艸】

楊香(やうきやう)【二十四孝詩】追虎ヲ助父ヲ 陽成院

つくばねの
後拾遺集序
つくばねのつくしくと
白糸の思ひをよせて
下畧
河東松之内
のさとりてふかくなるの
さなかまり
同書曰
こひぞつもりてとの
あをふ
峯よりおつる
近江台京哥
堅田落ノ
峯あたるここえてこし ちふ
まつちらきかくさそ あびき
おかへ銘ノ令
武部源蔵門人
涎繰文庫

つくばねの峯よりおつるみなの川
こひぞつもりてふちとなりぬる

むかしむさしの国かさいこほり孫左衛門といふ五
のこひやしなひけり人の女のむすめども
てりそれぞれをとよめるなれ
つくばねの○つくば羽ねといふからは正月の女なり
のうちはかざりすてかの少将のむすめも
おしやらくと羽子をつくあそびとせ
峯よりおつる○みねと峯とひかけ
つるといふ峯よりおつるがうつくしくりし
みなの川○かさいこほり雑と川ぞうりの示

名頭文字 二曰
峯定鶴亀
松竹
画本千字治川
猿人狂哥 二
よりとも八ぞん
あさいあり
あそて
莊子 二曰
鶴ハ不日浴シテ而白
おつるハ一日ゆあみせずとも
うつくしかりけり
男女代八卦
十二ろんくりやうの示の
やしなひの母よりれける
の子が千代とうけける
ふるさとのめて

おやしのみねの峯をつく羽子は川へおちてい
りとのおつるが羽子拾へとゆうるがお峯はそ
したがへ川へおちし羽子とらぞかへげて
とりあげてあるおつるは拾へとちし羽子を
是をつくしてとりえずそのすくまさてとく
此羽子と地形何ぞどの毎のかり人のひお
つるが家しやうとせうびしのひめうけとかくのふ
こひぞつもりて○孫左衛門は一家中のこひとなる
ゆすふとどふせ付られお峯ゆき中のこひをたで
とりてかさいぢうのひやくしやうかうりその代
がはりくて今は大がね持となることおつるの後にげこ
ふちとなりぬる○そのうへおつるは後代つぎ紋

和漢朗詠集

鶴帰旧里

おつるがふしぎとききて
ふるさとへかへりしことを
つくれりこのはなが
古るすぞ

相鶴経ニ曰

鶴ハ陽鳥也 因金気

おつるハとうく今ノ子
名人のある生れつきぞ

花扇書待乳山碑銘

名月やところどころの
まつちとまつちの山
五町

やどしたれどそのほまれをうざとて孫ながら
みなすへ人のちぐざされるされどみちと
なりぬるとはなり

瞽女唄 唄ニ曰

おつるがもうげとおけてこよ
なかよしそよしわたく
かわつのけ
「此おもうさへまて
うらひ出しなるべし

江戸砂子

とんかんハふりとのつるや
うとめのかんよのまんざう
いたまことなりけり

東海道中双六ニ曰

ニ鶴之のまんざう
うるかし川の名おとアリ
「此おつるがのがれぬ中なるべし

在原業平朝臣

本院左大臣
時平 基経男

金平 坂田

川越平 川越産
コイツハ人ノ名デハナカツタ
ハカマニスルモノダヨキヤアガレ

實平 土肥二郎
仕ニ鎌倉殿ニ

兼平 今井四郎
仕ニ木曾殿ニ

大平 一名ミツボコトス
ヌユイツモバンシクル
ワセダ

業平

「ちはやふる

道外百人首

なり平のうた

「ちはやふるきゝもしなきて
くゐなさとんぼり

下ノ句略

毒虫去ルうた

十日ニ五千
道目おとさなかれ

「ちはやふる神代もきかぬ竜田川
からくれなゐに水くゝるとは

「此うたハあまりよく人のしる所なれどもそのあ
やまりとたゞし口伝とするなり

「ちはやふる○ちはやといふ女郎ありけるが
ある角力取その女郎をあげてあそびけるに
此女郎よくきらひをふるくせありてかの
角力とりをそのまゝさんぐ〜ふりける
神代もきかぬ○この角力とりハちはやに
ふられてくやしくひとりねしてゐる所へ
いりし女郎の神代といふをいくどもくどいてみれ
ど神代もきゝいれねばなり

「竜田川○この角力とりの名を竜田川といふ
その後角力とりをやめとうふやをはじ
めとせいをだしける

「からくれなゐに○ちはやハあまりきらひをせ
しゆへ年あけのじぶんもさきのあてもなく
ついにおちぶれてこじきの女
房となりてかみもゆひあげず見すぼらしき姿の女
房となり今ハその日をくらしかねての合
なにもなくてめしとてもくふことならず竜田川
が店へきてとうふやへとうふのからを

「竜田川

古今和歌集序

秋のゆふべ竜田川に
ながるゝもみぢハ
みかどのおほんめにハ
にしきと見えたまひ

「嵐雪玄峯集

そめまひとり
あるかや
秋の
から
にしき

〽うすくれなゐ

當流小謡 山姥ニ曰
柳ハみどり花ハくれなゐ

〽なみだ

てまり唄ニ曰
いそがねばめぐりなひとてからきて川へ身をなげて身ハしづむとも名ハうきさゝそゝで女子のなんと云々

めらひまれしがたくて川ハむかしのいにしへがおちたへからをとれねたちのんとからくれないとぞよめり

〽なくなり○ちゝやハきよせんらうなて死なんよりハいつそ身をなげんとからき川へ身をなげけるをのんをなくなるとよめり

〽とは○とはトハちゝやがおさな名なり

伊達競阿国戯場ニ此なのんとつくれり
角力とりきぬ川と云鬱田川と云名のなんなよりてちゝやをころ尾子よりくてとうふやをなんぜん寺とうふやよりくていんと切ふのうを代とうさよ女せうしる尾を入れのてんすりてますなまでうなかけなのきなる

伊勢（いせ）
伊勢平氏嫡流

伊勢喜
豊竹伊勢太夫門弟芸子
アダ名ヲトウナスト云

伊勢三郎
義經ノ臣
四天王ノ一人

伊勢四郎
御藏前

伊勢
竹村氏
吉原住菓子屋伊勢

なみはくく 土佐日記ニ云
いのしあらかぢはくさめも
なし。うみやうのりのもなさ
ほなりのしやしもおぼず

伊勢暦ニ曰
吉書始 そろさめさそえしか
万よし
そろさめよりひくさむる
んなり見 公事根源

みしかきいのし

荘子ニ曰
鳧(カモノ)脛(ハギ)雖(イヘドモ)短(ミジカシト)
續之則憂

いろはさん之
あしいそしかく
てへなかし

なみはくきみしかきいのしのまも
いろそこのよをさそくしてよいや
浮世如夢(うきよはゆめのごとし)となるんとよめるなれ
なみはくき○名子歯固(えくさ)とあり「えくさめの事
みようをえくへのよわいをひろさむるをいゝり
歯(え)の字をよわひとよむ事なり
みしかきいのしの○鳧(かも)のあしのみじかくさよ
ゑさく人のいのちのみぢかきをいゝり「このニ句れ
はいの席(じよ)あそびまでとりてかんなりごえ
ふしのまも○不死間(ふしのま)とあり「ふしてくまぐまれ

かいかと軍記 羽今せゝめの振
かいの花ごし がしとひとど
これをとつぐかなきこなん
つるのくらしなかしとひへとど
これをさてかられひなん
又云
路者のえけこじかしと
いへどこれをとつくべるときひ
なん延のえをそつるなし
とつへとこれをたくかるな
しきなん

ふしのまも
不老不死国ノ事ハ
詳和莊兵衛ニ也

三才圖會ニ曰
不死国
人色黒シテ而不死セ 樹ニ有リ
食レ之ヲ壽(イノチナガシ) 泉有リ飲
之ヲ不レ老セ

うるしなかくねを何うかもぢかざるなるよつ
とやよのごんさるなとごしんぶのみひとふるか
おごんどこ
いのそこのよ代○粟飯(あわいて)かしくうちの時の
此世なれをと又くどくいかさかのこ
そくしてよりや○うろくとさぐしぬ
よふとへるるひんげとやといつねせへさ
やいそくよあり

「あれて此よくとさとく〜ていよとや

【矢根五郎せりふ】ニ曰
こいしとぬぞひむぞうさまこれくんふんのまくろぞとふんぞりくりてはむ世ハ 下略

ヲランダ本草【DODONÆUS ドドニウス】ニ曰
AWANOMOTI MO（アワノモチモ）
IJAIJA ZOBAKIRI（イヤイヤソバキリ）
ZOOMEN KOBITAI（リヨメンシイタイ）
NA（ナ）
一トダリヨリヨムベシ

【異聞集】ニ曰
呂翁廬生ニ取テ一枕ヲ授レ之ヲ中略
寤レ夢而黄粱未タ熟セ又見【枕中記】ニ

【謡曲邯鄲】ニ曰
さてりえのまハ粟飯の下略

又【黄表紙金々先生栄花夢】ニ侍ルカ
又一説ニよれハ水の泡で此世をとくろんあり又云
引事あり又くんりうべきとくと

【維摩経方便品】ニ曰
是身如泡不得久立云々
このみハあわのごとくひさしくたつことをゑずなど

素性法師（そせいほうし）

素盞烏尊（そさのをのみこと）【神社考】
【神代巻】——素々法都（そそそほうづ）道ハ者
辨天経ヲヨンデ町中ヲクワンケス

素傳（そでん） 東野州
千葉氏

素外（そぐわい） 谷氏ノ俳人
神田玉池住
一陽井ト号ス

素性

「今こんと

周易

䷁ 坤卦文言曰

乾為天坤為地以雉音謂之乾以狐音謂之坤云々

○嵐ハちらくかゝをりあく とびハとろくるハひんく うしハかうさるハきやうく 全相

狂言記

「こんくわい これハなりのあそびのかたちなるぞ かなしき

「こんもくわいもなき のふきこゆる

「今こんといひしえうりにふるつきの
なりあひのつきとまち出るなか

「けふハそせい法師ちうの千の日子王子い
ふりくすぐでしらちのさえ

「今こんといひ○今こんといひしハさしうきろ
ぬのふくころでおんてぐ

「はらりこぼるふろつきの○柴(しれ)うりの男と菜(な)と
うりの男とやうりきうて見てろさとうされてひ
るふうき中うみ日がくれてさうがきれふく ふんくさ

「なりなけのつきと○あきまでそくとの火

「なりあけのつきさと

観無量寿経ニ曰

若見此光明皆得休息

○ありあけのとりの火のひかりをさして二人のものハふもとへのとりゆくきうそくとおもきとくるとをときさのみ

謡曲殺生石

歴(やや)くへのかたちハ有ながら

とありあけあんどうとふえそのつきたる
家を目あてにゆきてこうら

「まち出るうなかっ二人の男ハよふやく町へ出る
うかねてさうをみだろされさらとおとぞ
まゆけとねうせしるのそしくその
始終(しじう)をよめり

神祇拾遺ニ曰

和銅四年稲荷神影向ノ偶イ了ス仲春ノ初午ノ日ニ故ニ至テ今ニ用ユ此日ヲ云々

白狐社在一條北ニ

著聞集ニ曰

稲荷ノ末社ヲ号ス福大明神ト

古音譜ニ曰

ゲヤマノゲツ子ハゲノ子ヲクハヘテ。バゲヤ。ゲヤ・ゲヤ

昔流行唄ニ曰

むかふの山から狐がこまでくく　でくくかよれど　人さくぞろさすや　よふくよろのしく　云く

長谷うしろ面

人をいつわることとのぞうさ　さとさるちくしやうの下略

大内鑑

子わかれの段ニ曰

「どふじや狐の子じやわのと

三條右大臣

三條小鍛冶宗近　刀工

三條右衛門　熊坂が手下

三條勘太郎　哥舞妓娘形　京下り

三條小六　曲マリニ名アリ　マリノ小六共云

三條右大臣

名にしおはゞ
伊勢物語 なり平の歌
名にしおはゞいさ こととはん
名あるのおそくより人の 紅葉のうち 翠とよあり

名にしおはゞあふさかやまのさねかづら
人にしられでくるよしもがな
名ねしのおそくは千九にて三条の右大臣
よみ入せしうたとある歌也
名にしおはゞ○名ねしのおそくさ
みとねとみ音お通
あふさかや○三条の右大臣坂屋といふ商人
家人より入しうた
まろ○より八旧千九でもまざるよりあのんのぎ
でらうひめのとぞ申すまのなりをして

さねかつら
謡曲實盛ニ云
是といふかげれおちてかくの
ならがとなりけり
人にしられて
百やお七さい文ニ曰
人にしられせんくさ
おさミ今ハワグこミか
くごときらめ
くるよしもがな
世諺問答ニ曰
寒氣きしく雲も
かりて初て霜をきる
よって霜月といふ云く

さねかつら○さねかつらのねぐん子かつらか
づらの事を白髪(しらが)とくろおぶらで隠
しまも
人にしられて○此おぞくいつてふんのようう
ぬけの事へんな女房とおちてもしほと忍ん
でもとる時はさきの人さぞかむられるで
あらんとこのどくぐりてそ
くるよしもがな○ころは八月下旬なれど
三条のかくんてく字へより入してくる夜も
霜がおりしそよりて来る夜霜哉とよ
めり

本朝俗唱ニ曰

三十振袖四十嶋田

和漢朗詠集

白楽天が詩ニ曰

昔為京洛聲華客

此おぞでもむかしハ
京のいおりのりさおとり
すておちやらくとやりし
むすめおりしがとさろう
うらいの詩あり
中むりしゑらその
むすめをとえらすませてと
いふうさのそうやりしも
此おぞらいがつろうさとさとを
いつるあるべし

一説ニ此人なぞらへは
さそられて六あらぬく
まので川るところ素
やよひのころありしが
くしよりての素れ
てつるひでといひし
より世の人素乃のつら
きといふうしがよろてれ
此ぞりもさんなよがよい
とらひしそとしえ逢
る此人らのうらさ
すろべし

春道列樹

作本 春太夫

正傳フシ元祖 春冨士正傳

春信 鈴樹氏 浮世繪師

春道列樹

なせのうける

假名手本忠臣蔵 七段目 二日

たゞひてふしにうせうけて
とくいさうぎの大ことを

山かはなみせのかけるありうみハ
流(なが)れもたへねりうちありけり

東武深川の名ぎれひとりのとめ女あり此まかりと
そろいてきちぎてを全てこあがりをしてハ
よびしかうしそれもあられねよふなりけら
くじやうみをよびしとふきくととこの女の
こゝろさらしていらねおきてあるをとよみる
山かな子○深川すてハ海手のおうと海側(うみがハ)とて
山手の方を山側(やまがハ)とよふその山がハの方のえ
こゝやふみるとめ女え
わせのうける○此めんをとらてみるうちをせ

江戸名所往来 二日

深川浦ち絵図(えず)く
白紙出のく大漆
ふかうれも

質屋張札 二日

定
一御觸(ふれ)諸うの品
一切質物ニ取申
まじく候
一御法度の品并ニ
盗物之質物
一切取申まじく候
一質物八ヶ月限り
お流ニ申候
仲間行事
月 日 在判

五明楼墨河文庫 三めぐりを納め
答扇集 上ケ名略ス
かなをかられる川のかよひ

とうけるうさことせんとひきまふがうさその女
の名よせうれ
志うらこれハ○此せうふうわさ志がらしける
身ハ志てんとむくひで
あられもたへねも○とてきちのあがれるもれ
りよ男ふたへねも
こちあかへれり○いづれ意のこちあかりなり
とあきうめてるんとまあり

鍾

あへゐも

めりやす 皿の釉

いつそあの子ぬこふ
したとてもかんよ
あるまじひよしな
やつしや

こちら寺なり

謡曲道成寺

こちら寺の鐘うけ
さなる

史記 仲尼弟子列傳曰
犂牛之子騂且角。雖欲勿用。山川其舍諸
○孔子品川ノ山側ニ大木アノ牛ヲ見テ曰ツ語ナリ

忠親 亭

山がハるかでいでさてかく
せうらでくるるり
○品川のむさやふあしちどめとよ

一説
哥舞妓惣巻頭 中村富十郎
慶子
弘慶子 チヤウセン人
辨慶 義經臣
運慶 佛工
恵慶 未詳

恵慶法師

恵美須屋八郎左衛門 尾張町

恵美押勝 道鏡ト仝時ヲ

恵心僧都 名ハ源信

恵慶法師

千載和哥集

糸のめのとの哥

むかしミし松のこずゑも見えハ
それかあらむむらくもの
嶺をさしてけるかな

「むかしみしとハむかし此
あたりで見たといふ心
松のこと松賀やの瀧山
といつてうつくしい女が
住だが今ハかげもなく
こゝへ小杖と出て
香山がしやりくつ見の
事をむさらの嶺をさし
てるかなむさらの住し
家も今ハ住人も無く戸
ざしてありさくへの札が出
てゐるとあげきてかり

本所旨目

糸屋阿房情下ニ曰

目ガツブレメラナヨノ

八重むくら志げきる嶺のさびしきさま
人こそ見えね秋ハきにけり

中むかしのころ志のゝをのゝ出まての事
あたりに香山なぞといふむかし目ハ
見ねどもそらかくね身代まで松賀や三代
目の瀧山と身うけしてひつそりくらしゐる

事とよめる

八重むくら○とね川の東西ハ俗に云むくらも
ちとふりの多くまきて庭のつらを八重十
りんドにありあげうるそく出くこのみツ文

志げれる嶺の○香山ハ瀧山とふかうまハ日
事ハまづけしきをよめり

事アイソノツキルハ
モヤウノモノ云こ

本草綱目

土豹（ウコロモチ）
土中ニ住ム虫形チ
似タリ鼠ニ

「ユレ俗ニムグラ
モチト云モノ

さびしき氣よ

茶道大全ニ曰
茶事ハ器の𫝆（さび）
るを好むにあらず
氣の𫝆（さび）るを好む也
云こ

志ぐれてばかりゐるかな

さびしきさま○𫝆氣（さびしきは）あり瀧山ハ女ぶの時より
茶をとこのころかへさびしく来しつまで住
居のものむさきもこゝに瀧山がこのころかれて
さびさものむさきさ

人こそ見えね○これまでいさかりのすきの住居
もかんじの人そのりうりく申ぞみえねとあげ

秋ハきにけり○瀧山もいへどもいくまてまね人
とてすてゝ見ぐうができきよいかしら
あきがきてあるよひそつた志のび出いづら
「されそのふとあきハきにけりとよめること

謡曲景清 ニ曰

こゝろこそ（ば）さけどもめかけとみね盲目ぞかなしき

老子經 ニ曰

五色令二人目一盲一

左傳 巻六

目不レ別二五色一之章一爲レ昧

城州嵯峨五臺山清涼教寺藏版

栴檀瑞像記 二十五牒目ニ曰

文明九年の比なるの佛光破損しけるに鳥山の何某とてすぐれたる細工の者ありけるにおほせて修造しける

これ此鳥山ら先祖之

貴家御文庫

二条家口傳秘書 ニ曰

一 繪をかける經冊出版のこと

月日の下に添へたとへ年号次第ても筆工名を出して出版されけれ候の様子可考見ゆるこれは日をかけさせぬやうにて出版すべきは鳥丸光廣公の年号の見えぬやうに眼をとうかつぶして出版するにあり是れいかなるすやに傳あるべしと云ふ

今様にこれ以後も鳥山より以来の出版なるべし

源重之 こふりくしけゆき

畠山庄司

重忠

景清合時

善茶峯

重井

御乳人

重太夫 重太夫ブミ元祖

重山 四目屋抱 遊女

重之

豊重（とよ） 富本門弟 田所町住ス

重政 字ハ勝助 爲勝家カ 忠死人 髭受（ジヤウ）

重政 北尾 字ハ左助 浮世画工

風といふこと

病源論曰 風邪寒熱毒氣

竹取物語云 風おもき人にてはらいとふくれ

傷寒論曰 發陰者七日 發陽者六日

又詳 倭名振出能書曰

醫療手引草曰 風邪六七日不小便頭痛者

風といふこと岩かつ波乃とのもとのみ
そさけてとの代れのふところつれ
それの海府よりありけるところどころ十年のたゝ
おみとのりしてひとつの岩とそそりふ
きらせるをしるとよめるなり
風といふこと○みるしみまて貴人のきこえあるし
まつりきりそのところ風のこゝちまて身かは
いとふりれどもかくんかんのあはせとりてよふ
くそてちよく仲呂のまつりきりとさく
やるひろるよりて風といふこととよめり
岩かつ波の○あらうるするあるとよみきおぼえと

少治拾遺曰 ○いそふそふりてらうろうせよりり

承氣湯與之云

大成論曰 風邪万病為長

山岩かつ波の

文選 海賦曰 飛沫起濤

波ノアラキ事

歌音御詠歌 ふさらくやさしうり 波の下略

大ぜいかつりてよふくまづる多まではあげざり
おのれのくみさけて○さかでたくさるが岩か女く
かのまどりきりどもんさきおのれさき
とのこでくずきしるえ
かの袋○かの岩をさしてかのとよすひか
のよとみまりあり
かれふところか○のこそでくぎさてもまでかる
きるへころをりてよふく人家まそで
ろがしてきうりしるえ
漢武取鄧支進馬肝石帝
以此作硯 此古事とよめり

「おのれ」

小野篁歌字尽 二曰

巳己已

みはうへにおのれハしもにつきにけり

「ふでてよくとく文帝のみおのれハしもてつきまうとかの硯きりのうゝく

「のく」

玉篇 二

鑿（ノミ）穿（ウカツ）レ木ヲ器（キ）也

めのやまと 筆

硯のうミに身をとしつめさむひつめてことごまめちるとまいしてくさんせ

藤原（ふぢわら）義孝（よしたか）

朝夷名三郎義秀（あさひなさぶろうよしひで）

新田小太郎義峯（にった よしみね）

大星由良介義雄（おほぼしゆらのすけよしを）

義亮（よしすけ）本田義光男

義松（よしまつ）天川屋長男

義孝

「いのちさへ
伊之助 はすはなくあつて浮世猫と好ト云
新内ブシ
仇競恋浮橋 二日
とこをぬけ出あさべやすみのびてひとりゐの女が

「君ゆゑなれしかりさりしいのちさへ
おしくもかなしと物をひかるこの句
「むかしどなたあり伊勢の古師のつまと
なりしがひさくゆふかぬひさかひて伊勢
とよちのこゝろをとつけてさられたるがその後
かさ目なる男の所へさいなんとむすひしを
とよめるなり
「君かなゐ○人はこゝよりたぐんとのべたく
きてはさ目なりとも
「とかくさりしいのちさへ○此句に古師(とし)

八ッ廿一

「長くもなと
仮名手本忠臣蔵 七段目二日
女のその主のやさしさりしでもなとらず
めりやすで秋の夜
長くもなとちぎりて
筆のいのちもなまみの
うくよ

かへられしワが身なれでひとりある子の
伊之が乳(ち)さへとめてござるならきもふ
しかたすまゐぞとおもてられるなら女
房になつたといふこと
「なかくもかなしと思ひかるゝ句○その心
とふるまとこの男の所へなかくあるとも
ワるやうにならでなさと志てめてやらう
と思ひかるゝまんとくどく文 仮名(かな)とゑめ
たり
唐李克用一目眇(スガメ)号(ガウ)ス 独眼龍(ドクガンリウ)ト

山海經ニ曰
一目国(イチモクコク)北海之在(アリ)東ニ
人皆(ミナ)一眼(ガン)

一説
此女子源氏が紫の巻をことにうるハしくかゝる故への名のことくあらハれ出るふとなりかのおもひをとめてゆるしきさ紫のちすきふかきこゝろよりゆかしさにあさきふといひたのとんとなうみを下りたまひてなくとす

河東松の内ニ曰
「とんとおらふかべ
んかやさん

紫式部(むらさきしきぶ)

後小松院落胤
紫野一休(むらさきのいつきう) 大徳寺

紫姑女(しこめ) 姓ハ何字ハ媚 見エ「紀原」「代酔」ニ

紫夕(せき) 又濃紫(コムラサキ)ト云 能(ヨク)ス書画香(シヨクワカウ)ヲ 角玉屋抱遊女太夫ノ名跡(ミヤウセキ)

紫式部 源氏物語作者

梟唄 二曰

まて二ゲふめさでしも
きんざよくとひてく
しやえり

めくるとなのひてみしやとれるとけうねまする
くもかくれふしよハうつきうれ
ある人のめくりとべりしんむれ〆て二朱ま
けうなそとよめるおうも
めくりなのひて○めくりとしあひてく
こしやそれとも○よくきてら赤蔵がうてやう
とりふゑがつきさルれどるそれとるよくみててんど
ふけゆうといふんとうやそれとるとよめり
けうねあるよ○まごろくかうとことけうねまるよ
くもかくれ○とうふがぐうとせきこんで九くら

唐詩選 平蕃曲其二

空留一片石 萬古在燕山

○ムナシクトドマル一片ノ石ヲ・トラレテ・シマウタ・ゴトジヤ・シレデモ・バシコノ・石ハ山ノゴトクアルヲ・ミテモウラメシイ

ちぬれるいお 二曰

九ぞんこありでち
十九十十三 大しちく

めうりきてその名を
きけバ赤尼寺此月ぬけ
ハそりちさるらん

どふけ百人一首

ふぢうらのよし
よこの急の七九三三るの
あざ上り よめのかちふけ
人もふくまん

とりなきてこれで赤蔵ハおぐらさらふなる
そのらと九もかくれとよむ
ふし○二朱をげアふくしてふしとよめり
とふく二朱まけて玄まふさるのく
蓼螺まあらん
よれのつきさうか○どふしてみても赤ぶよ
りくつきぬけとうふくと思ふうら夜
いおけたかれさり よれハよハ弱なり

唐人ノ寝語ニ曰

賭銭輸得清光（トウツェンシュイテツイシクハン）
メクリヲウツテキレイニマケタ

深川晗哥

「お月さまさへめくりがさきまで

めりやすを松虫

まさか月にめくりのあるよ
いくれんぞでよみさ川
つゝむゑみ一もどれ
とけねんとさよかりさ
うつてうれてころび
ねの

哥舞妓大帳ニ曰

なに舞台三めんのかるた大じんぞうしらの方桐の
立木日よけのあかよう六のくじやくまさひある
あをけ下座の方すゞめのるつるぎある
大こうていまてますく鳴り

仲蔵
一 あざ丸のちからへんじつよ対宗治作の家ざんぜう
上使のとらむさきころとアけころして〈ルぞ

彦十郎
一 へいハミ上使とへよくもぞけくりあざ丸のとう
ぞくかきのよみのぐしろくとなのれ

仲
一 何がなんといけすーりまうかありまどころ中よう
とんざくとおとなす

宗
一 十二くめくりあくひてこしや桑ねもかくねまま
トふきろくけまあけしやうじの
うちまで

海老蔵
一 九もかまれよしよいのつきねけ竹つなかんざん
トあげしやうじあがる

左京大夫道雅（さきやうのたいふみちまさ）

道端賣餅家太郎兵衛殿（みちばたでうりもちやのたろべどの）

道長（みちなが）　御堂関白

道賓（みちひん）　天神サマノヒヤウトク

道成（みちなり）　ヨウ曲道成寺ニ云

道無（みちなし）　アサクサ三ノワ古着コヲタヅヌレバ、ヂキニシレヤス

女子　松葉屋新造

道汗（ミチシヲ）　○ミチシヲホドナクコノゴロハ袖ヲトメヤシタ

道雅

「なむとばかりを

甲舎一休 おに

「なむとてとなふる人の
んこそ出てきこゆるさ
そのまゝのこく

親鸞上人御文章ニ曰

ナニノヤウモナク
唯一心一向ニ南無ト
トナフルバカリヲ

童子教

一日ニ一字ヲ学バ三百
六十字

「ひとつよみならで
ともなくこそせバ
地徳をもつてのみる

「いまハたゞかのひさんなむとばかりを
ひろくてなしていまのしものね
「これハなぜいのなに
「いまハ○今般(いまはん)の時をいふ
「たくさんひさん○面額(めんひく)といふ「たくさんといふ
そのあとりまでつゐてなるさ 紅顔空憂(こうがんむなしくうれふ)
「なむとばかりと○なむとなへるにゆるさるゝ
ところなく
「ひとつてなくて○日ごろひとつもよみなら
とこなかなく
ひせでともなくなるのこゝろとよめり

女今川状

あとらく様でつまよ
ふじゆうなるのこゝよ
あらむてんとまいらう
てこおもとされ第多く
るすあれどくちをしさ
てくぐらし

古状揃

初登山手習状曰
執(しつ)閑(かん)老(らう)来(らい)後(ご)
悔(くわい)不(ず)可(べから)也(ず)

「いふよしもなか

中臣太祓

申事(もうすこと)乃(の)由(よし)於(を)
「これより知るなく

「いふよしもなか○おとくのこゝろ子どもへいひとく
るもこなかなでかくれバなからねといふひ
るけくそのんをいふよしもなかとよきなく

論語
人之將死其言也善「[illegible]よきことをいふナリ

遊女白目ガ哥ニ
「いのちだにこころにかなふものならば何かわかれのかなしからまし

摩訶摩耶經ニ曰
譬如旃陀羅牽羊至屠所。步步近死地。人命亦如是云云。○人ノ命ハヒツジノアユミノゴトシト云
△センダラトハ天ヂクニテ狩人ノコトヲ云ゾ

権中納言定頼

定之進 猿楽 見染分手綱ニ

定九郎 斧九太夫男 為勘平ガ横死ス

定光 頼光ノ臣 又作貞光ニ

定頼

朝ぼらけうぢの川ぎりたえだえに
あらはれわたるせぜのあじろ木

一 鯔ぼらけ

卒都婆裏梵文曰
中天 アサ ボラ ケ
南天 ヲン ボロニ ケン
むかしく天竺ニモアツタトサ
早引節用 氣形門ニ 鯔 シ
日本記ニ 鯔 クチメ ボラナリ
一名 ハラブト イセゴイ イナ ナヨシ 見エ 順和名ニ

鯔ぼらけ○青砥ぬしがなめり川の古事をよめり
青砥ぬしがさうなくさまを称くとて
子鯔まなめり川のかしへ鯔をとりに遣はさるゝ
ぼらけハ鯔焚え女がけへふるまけへおぞて

うちの川ゑを○此人きのまろね男まてうてぐ
とふしもゆくごく
ぐれをとりて居るうちやまろぶしてなめり
川へくびきりをちりしをやとりの釣菜や
のてひもうけつけ引あげておやうきとた
るけるる

たえくみ○いのちもふえぐまてあくあぶる
ひるまさとるくり

ぜにの銭なり
風俗通ニ曰
錢号為孔方 兄云如兄ノ也
あしろ本
神錢論ニ曰
錢曰孔方 无翼而飛 无足而走
○此所まあてくハ錢のあしろさ錢足須器あるべきり
「ぐくみぜをと お足とくふも 此由くり

川のもれやる○此さりぎたにぜにをとりひし
あまりのぜにを川へとうしれたるまてゐ
き男女人とたのことゆうくとりあげこれ
できうがあらわれしといひける

ぜにの○ぜにのとふすなかち錢のあゆくぞえ

川のどろ本○これハさきけてかうひしおちや
多のあんどうに出てありしみまえ

風俗文選
許六鎌倉賦ニ曰
片瀬川まハ宗盛が家まのかげをうつし滑川まハ

太平記ニ
青砥が錢をさがして
青砥藤綱滑川ニ堕ニ十錢ヲ

鎌倉武鑑ニ曰

青砥左衛門尉藤綱

◎回 モン所 ビガノ上デ 一万石

十文銭 西ノ夕ボデ 百万石

鎗（ヤリ）すや ナメリガハ

ヨサヘ 合羽 米 アジロ木ノ 木ノ字

時献上 鮨一本

纏 フジ綱ノ ハシジ物

ちんこう紀

寸十尺緞子まくひのる

○たとへバ猩々緋のうちも大ぼらをと六百三十六文ニそしらひ川へ十文をとしたおといひわどもそしといふ附にあるや八家代をと十二文をとき待とさせさ男日やうを五十文つわすきのとねらし代の三百文まてざる時はとわりてござあとくらぬくそんなこるるとへおへでもよしさ

延喜式 巻之五

五位食法ニ曰

東鰒（アツマアハビ） 隠岐鰒（ヲキアハビ） 烏賊（イカ）各一両

鮨（スシ）一両三分

○此トがんくられバ緞一たが六百三十文ハ当まひのの也

祐子内親王家紀伊（ゆうしないしんのうけきい）

然阿上人

紀全禅師（きぜんぜんし）

紀文（きぶん）

紀伊国屋文左衛門○事八

見 吉原大全 ニ

奈良屋茂左衛門ト全時

紀上太郎（きのじょうたろう）

浄瑠理作者

見 白石噺 ノ跋ニ

紀名虎（きのなとら）

見ユ 文徳實録 ニ

紀伊國屋（きのくにや）

沢村宗十郎

訥子

紀伊

伊勢物語

からくしてぬすみ出て
いとくらきに来けり
あくた川といふ川をゐて
いきければ

「かつら川のなかれも
けたくひて

ぬれもこそすれ

元信百鬼夜行ニ曰
濡女(ヌレヲンナ)　「おまかせえ
するか

うつほ物語 かつらの巻ニ曰
れんくうつら川のほとりに
あるかとおもひもはへらり

「此川なり

源氏物語 松風巻ニ曰
かつらのゐん
「おもんなさつと
かつむるのる

青すさくるしれ浜のたつさ波なり

かけしや袖乃ぬれもやせむと袖

此おはん長右衛門の狂言をよめり

まなこく○きぬよきこえて家を出はなれ人

どやといふ家と聞とあふ方へかけてよめり

あるしれ濱の○あるらいやと濱村やと家名の

かーら字と一字つてよそへきりこれはおの

おもふなるべし

かつら波は○おはん長右衛門のじやうるりのげだいを

なかぬ瀬川の仇波といふるものへて

かけしや袖の○おはんを長右衛門がとふさ時

催馬楽ニ曰

「いしかハのこまうどに。おびをとられてからきくひする。いかなるおびぞ。はなださのおびの なかハいれたる見
（市川のこまおおま）（帯やをもおつかるか）（さとやぞの帯）（なかひきさ）

奥儀抄ニ

なかぬ瀬川仇波

おはんとせおふておちあふ
あふせそくそねあさ
あわと下略

ふり袖と長右衛門がかくしけるものは此

一句は長右衛門のかりをよめり

ぬれもこそすれ○此所はさがひもぬれぬれあり

又かつら川とけなる時袖とうけてはおちる

ぬれもこそすきといへるなるべし

浄土文ニ曰

得(ウ)夜(ヤ)夢(ム)正(シヤウ)直(ジキ)心(シン)常(シヤウ)歓(クワン)喜(ギ)

顔(ガン)色(シキ)光(クワウ)澤(タク)所(シヨ)作(サ)吉(キツ)利(リ)云云

○夜(ヤ)夢(ム)とハとはせそくそねあいあひをとこを浄るりの名ニ正(シヤウ)直(ジキ)とハ正本の直伝といふの心(コヽロ)常(ツネ)ニ歓(クワン)喜(ギ)スとハ常くよりも見物が来てよろこぶ顔(ガン)色(シキ)光(クワウ)沢(タク)とハ踊者がうれのうつくしきをほむる所(シヨ)作(サ)吉(キツ)利(リ)とハ不作のわつらをるてひまうるいさの吉のドもたくるとでなりしが大入の利をとるるじやまで

松本幸四郎ハ琴高仙人の生れかわりと云説有

列仙傳ニ曰　琴高善鼓琴後得仙乗赤鯉来人間

○錦考善鼓琴后得給金乗赤鯉至京都○事ハ詳也　三ケ津評判記

菜ミ之巻ハ毛澤の　つうしの件ありト云

漢書註ニ　鴻聲肕傳之也

○漢ニハ通事ヲ　大鴻肕ト号ス

△今スナハチ文字ヲ　アラタメゴウロヲ。サカシマニシテ　路考ト云

これらより出る　せりふあるべし　あとくんかふべし

八ツ　卅

源俊頼朝臣

俊陰　事ハ詳ニうつほ物語ニ也

俊頼

一説ニ此人百人一首ノウチニテノイツチ年寄ユヘ名トス

うかりける人をはつ瀬の山おろし　はげしかれとはいのらぬものを

やまとのうたしろかねのこゝろみひとつの

風土記ニ云

泊瀬山(ハツセヤマ)和州(ワシウ)在(アリ)城上郡(シロカミノコホリ)ニ

此女の名より山の名とす

うぢ神と云ハ龍田(タツタ)ノ社(ヤシロ)ナルベシ

女ありせいじんのむすめ子ともとうちへ生れてうるはしかりければとて母もとこしのつてとれとめてかたくて右大しやうけのわくはてんまさごはあのおさへ子をしかる此女ひとなりてきえびんに生れつきてゆちらんさんきりの更へ母一しほあんじ三月の節句をまつひろうぢ神へ身のうへといのりのさい母かみともへ娘とともにまうでけるげとよめり

うはさりる○ともにつれし男かろくりとの娘のをそとげける事なりをれそうかりけるとよめり

人を○そのともの人とあり

和哥八重垣ニ云

はつせの枕言をこもりくといふ

「此女うちみゆるときはこもりくとしるしをゆくこもりくのはつせをやくいふなるべし」

くとことよ音 古説

はつ瀬乃○その女の名を初瀬(はつせ)とつけたるゆへ

はこに此やうに名をつくるなり

山おろし○はつせはさんびんに女更へともの人といけどんに男ごゝろもおもひれおろしけるを

山とふうぢ神のお山でのまへ

あけしかねといのつねりのとを○そのやう

ふけげしく生れつけとは此うぢ神へもい

のらねりのとと母の気更へるふさと下の句

によめてよめり

八文字自笑作
世間娘気質ニ云
けむそめそげしき
生れつきまで下略

泊瀬紀行 儀同三司母
げそてぢらるるこゝち
してけおとりして
おぼゆ
「身のほどをしらせを
さげさをとて
なふ

女今川ニ曰
人とめし仕ふる日月のごとくを
てらしのふでとくんをめぐらし
そのくにえらさびてめし仕ふ
だらさとぞあらん云々
「これらもけえるせずでらさ
女をいましめのけいるよ
あるべし

草ヲ紙
馬鹿文盲圖彙 中之巻 書入ニ曰
せうちんのまへでとろさとれ
くそとろし
とてもとろさとれ
とておろしトるく
「山をとろしも
けさぐひを

崇德院

人王八十一代帝
安德天皇
德宗權現 相州鎌倉

大威德明王
聖德太子 今ノヤドノワウジ 厩戸皇子 未来記作者

八大龍王九代後胤
德叉迦龍王
德願寺 行德

中家德 高輪 茶屋
一寸德兵衛

三国志
玄德 蜀ノ 劉備
貞德 松永ト云 誹士
桝德 舞妓 哥

「岩にせかるゝ
兒女哥 二
とつちくゝちくゝえん
ゑむぞんのおとひめハ
岩にせかれてわくと云

「せかるゝ
平八年忠所撰
水のながれのせかれハせくほど
よどむもつきさるの人を

「われても末に
助六所月里　河東ブシ
ひくもひくもひく〱おかさ
末の松山ふみかけて われても
末にあはんといふちぎりの
袂のちぎりひるの合

助六所縁江戸櫻
つゞきら茶やにぬれて
ぬるゝあめのこのさくら
此人をよみ

祭ル金比羅ニ
崇徳院（しゆとくゐん）
徳竹（とくたけ）　御厩（ヲムマヤ）　芝居番附
徳治　名見崎
徳治　大谷

「瀬をはやみ岩にせかるゝ瀧川の
われても末にあはんとぞ思ふ
大坂のくるわ荻屋（をぎや）の瀬川（せがわ）と云遊女（うかれめ）
の事をよめるなり
「瀬をはやみ○瀬尾隼見（せをはやみ）とふざける瀬

萬葉集
弓削皇子御製哥
芳野河逝瀬之早見須臾毛不通事無有巨勢濃香毛

「此御哥のんハ
瀬川が早見を
ゆゐことまでつくも
ちゐることゝなしと
なりたし

川がきみくなりけり
「岩にせかるゝ瀬川の○岩といふもたき川が
きみくまで隼見んとせいてよばせずやまし
くいひくよつていまにせかるゝたき川と
よめり
「われても末にあはんと思ふ○たき川ハ
岩にせかれわかれてふせかれわかしても
隼見が身とわかれてたとへわかれても
中の丁の末の浦茶やで逢ふとゐふを
そのぶんとよめり

方丈記　長明
たき川のながれハたえずして
しかももとの水に
あらず

枕草紙 くるしげなるもの
「こゝちあしくなやましうて
ふすべられたる
「瀬川がすこしとふらひくれ

宗祇秘中抄ニ云
岩枕「秋なり
七夕の枕
「岩枕はたき川にて
やくられて枕を
ならぶるもすれなれば
七夕の枕ともいふなるべし

半太夫ブシ
黒小袖 たれ
めもとにおもてのあるわざを
さそひかくるさとおもはし
「岩まくらよひさゞなみ
なさけと貞平と云
めなくておふこい
たき川がかへすく

○瀬(せ)落(と)速(はや)見(み)○瀧川(たきかは)

中臣太祓ニ曰 落(おち)瀧(たぎ)津(つ)速(はや)川(かは)乃(の)瀬(せ)仁坐(います)須
文字違よりおもしろかるなり

姓氏録ニ云
瀬尾 橘氏
栄花物語 さくら花の巻ニ曰
中宮大夫(右中弁隼見)
隼人司(ハヤトノツカサ)ト云官(クワン)なり 前漢書ニ見 [illegible]よりの名なり

寫本 歔打古郷錦ニ
瀬尾勘左衛門 好色のものあり
此人隼見が一ぞくなり

参議(さんぎ)雅経(まさつね)

経(つね)若丸(わかまる)―文字(もじ)経(つね) 常盤津門弟

祐(すけ)経(つね) 工藤左衛門尉 ―雅経

清(きよ)経(つね) 鳥居氏 浮世画工

「みよし野の山の秋風さよふけて
ふるさと寒く衣うつなり
「さるおてらのぼりさまよりからまでみられ

「こよし町の

【助六所縁江戸櫻】

まちかねてまてるや どうしてこよしの山口 こゝら浦くの

「山のあさ風

【新吉原細見記】

山口屋 ●巴

秋風 おごの そぎの

たるみとよめるぞ

「こよし町の○吉原の揚屋のところとさしてこよし

町のとおめるまでも

「山乃秋風○角丁の山口やふあさ風といふ

女郎がありしとぞ

「さよふけて○かのがらず此秋風といひしが

そろそいやがられ女郎はざしきとふけてどこへ

もゆりしなり「さよふけてよふふふむ

ふる里さむく○此さとへきたるひとどもかれ

ていた夜中ひとりねをしてさむひめをしてい

ふるさとへかへりしと不はさてもよく君と

ふる里ざとよ

「さよふけて

【筑波問答序】

ふきとてゐるもいと あさけなきこゝちぞ そゝりや

「ころもうつなり

【唐詩選】 李白

萬(バン)戸(コ)擣(ウツ)衣(コロモヲ)聲(コヱ) ボウヅノヒヤウトク

秋(シウ)風(フウ)吹(フキ)不(ズ)レ盡(ツクサ)

「女郎ノ名

【宗祇集】 題松下擣衣

上ノ句略「よるの嵐に衣うつ川 ころ

「嵐といふ字は山の秋風とこゝろえてよめり

「衣うつなり○かれがかうづめへきたらんでみるの

さとよふくんでさしむへどふで其ぞとりがき

さひりのと今はきぞりにてころもうつ

なりそのんとよめり

【徒然草】ニ云

かうしげうらやすり

かくれのいあらず

川柳点

【柳樽】五編ニ曰

これも又とあるまくらのうへざうで

俳諧

【とどすまさ】 意詞抄ニ云

虫家落 ひどい落

本朝武家評林巻三十六
秋田城介鬼女物語

文評曰

行末ハ秋風ノ一夜ニ替ル人ノ心見弃ラレシハ一定也左アラシニ於テハ悔共何ノ益カアラン

初衣抄終

江次第 十四巻ニ曰

あり平そのころハ在中将にて 中略 出家せられしがそのゝちかうそくとぞや さんぬるあるのくずやそてし叙爵いたる 下略

ありひらさへもかうむぞでん ありてあんどしこるさ

琵琶行

粧成毎被秋娘妬

秋風ガコトヲ云

秋風はとんだやきもちやきで あいつさうさ

かげろふ日記 上

世の中にあはれなるある物のもしあど とられどもよふあはれなるものごとふあり

「そらふハ秋風がかけのあす そらでごとし

京極黄門殿小倉山荘ノ色紙百人一首和歌秘中ノ抄一帖青楼妓女駒治ニ雖伝之堅可禁外見者也

天明七歳丁未正月初店日

茶飯吉奈良京橋

山東源京伝 在判

跋

此書八荻江氏駒治が。文庫なりしと。
むかしくうく何の枕にかくれてゐたるをあげさ。
乎ひとびとに求てそのふるきよしむ油町のぬしや
なるふ。師のこゝろにかなふのつくりかふるかく。
人の口のともいへりくも猶探するくまなん我も
いのちをながらへて。ぞこゝろよめるなる孫
狂歌のいろ撰集をもとめし。跡著なる抄
と題しゝ後編とぞ

京傳門子月池

朱翁鶏告誌

耕書堂蔵板目録

御江戸本町筋北八町目通油町 蔦屋重三郎

- 百人一首 古今狂歌袋 宿屋飯盛撰 彩色摺袋入 全一冊
- 五十人一首 東都曲狂歌文庫 同撰 同袋入 全一冊
- 繪本虫ゑらみ 同撰 袋入一冊 歌麿画
- 卅六貝狂歌合 汐干のつと 朱楽菅江撰 彩色摺袋入一冊 同画
- 狂歌春興 繪本和歌夷 袋入一冊 同画
- 繪本狂月望 月の名所をつくし 彩色摺 袋入一冊
- 五十番狂歌合 繪本百囀 寄々雛合 彩色摺袋入
- 五十番狂歌合 同後編 右ニ同
- 繪本武者鞋 北尾氏画 彩色摺 二冊
- 繪本八十宇治川 同画 全三冊
- 繪本吾妻扶 同画 全三冊
- 繪本江戸爵 歌麿画 全三冊

吉原美人合自筆鑑　名ある遊女の姿絵に自筆の詩歌をそへたり

繪本武将一覧　北尾氏画　神武代より将家執政まで　全三冊

繪本武将記録　同画　右の次編　全三冊

繪本武将略傳　同画　武将一流お編　全三冊

繪本百福壽　同画　長寿と福徳の人をあつむ　全三冊

繪本百福壽後編　同画　全三冊

画圖勢勇談　鳥山石燕画　全三冊

繪本譬喩節　歌麿画　全三冊

江戸名所百首狂編　繪本吾妻遊　歌麿画　全三冊

江戸名所百首後編　繪本駿河舞　同撰　全三冊

繪本嬉見童　北尾氏画　子供あそびのゑづくし　全三冊

繪本詞乃花　歌麿画　全二冊

繪本花の雲　同画　さくらの名所に狂歌をあつむ　全三冊

繪本銀世界　同画　雪中の園に狂歌をあつむ　全三冊

からやク

綃 綃